

疾患酵素学研究センター及び 疾患プロテオゲノム研究センターを改組し、 先端酵素学研究所を新設

2016年(平成28)4月

先端酵素学研究所は、既設の疾患酵素学研究センターと疾患プロテオゲノム研究センターを融合するとともに、藤井節郎記念医科学センターと糖尿病臨床・研究開発センターを附属施設として統合することによって、徳島大学が初めて設置した研究所である。

以下の異なる背景の4研究センターが、各々の強みを活かすとともに、有機的に連携し、研究水準の格段の向上を図ることを目的として、2016(平成28)年に設立された。

「疾患酵素学研究センター」は、1961(昭和36)年に設立された「医学部附属酵素研究施設」に端を発し、優れた研究成果を生み多くの優れた研究者を輩出してきた酵素学の豊かな伝統を引き継ぐ研究センターである。一方、「疾患プロテオゲノム研究センター」は、1998(平成10)年に設立された「ゲノム機能研究センター」に由来し、ヒトゲノムとその遺伝情報発現を担うエピゲ

ノム、さらにその産物であるタンパク質情報を担うプロテオームの統合的理解によるヒトの健康の増進と疾患の克服に向けて先端的な研究成果を挙げてきた研究センターである。

また、「藤井節郎記念医科学センター」は、医学部酵素生理学部門教授を務められた故藤井節郎博士の功績を記念して設立された一般財団法人藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会からの寄付により設置され、学際・融合コンソーシアムを形成してオープンイノベーションを目指した医科学研究を推進しており、「糖尿病臨床・研究開発センター」は、糖尿病が徳島県で克服すべき最重要課題のひとつであることから糖尿病の発症予防、重症化の阻止、健康寿命の延伸を目指した基礎研究から臨床医学研究を推進してきた研究センターである。

